

川端康成と藤波大超

大阪府立茨木中学校の生徒葬

宮崎 尚子

はじめに

ノーベル文学賞受賞作家である川端康成と、隠れキリシタン史料「ザビエル画像」を発見した藤波大超は共に大阪府立茨木中学校の出身であった。従来この二人の関係について言及はされなかったが、調査の過程で卒業が同時であることが明らかになった。本稿では茨木中学校の教師を介した二人の意外な関係について紹介する。

一、川端康成と「生徒の肩に柩をのせて」

川端康成は、開業医であった父栄吉と素封家黒田家の娘ゲンの長男として明治三十二年六月十四日、大阪市北区此花町に生まれた。肺病で父と母を相次いで亡くし、その後祖父母に引き取られたが、祖母、姉を相次いで亡くす。祖父との二人暮らしであった

が、その祖父も看病の甲斐なく亡くなる。このように川端康成は中学三年生までに直系の肉親を続けざまに失っている。その後一旦母方の親戚宅に身を寄せるが、中学校まで通うのに遠すぎるとして寄宿舎に入る。その寄宿舎で舎監だったのが倉崎仁一郎である。この人物は大阪府立茨木中学校で川端康成に五年間英語を教えており、日記にもしばしば登場する教師である。生徒たちに大変好かれていた教師で「親のような」先生だと評されている。川端も倉崎仁一郎には一目置いており、後年まで述懐することになる。

倉崎仁一郎は明治元年二月一日、島根県松江市北堀町に倉崎礼助とイネ（高見兵衛の次女）の次男として生まれる。長じて松江中学校で学びその時に加藤逢吉（大阪府立茨木中学校初代校長）と出会う。

小学校の教員を経て佐賀県の尋常中学校の教員をしている時に加藤校長に招聘され、創立したての茨木中学校に行く事になる。その後は英語や歴史の教師として二十二年近く奉職する。寄宿舎の舎監や学校の風紀委員長をしていたことから生徒達に怖れられながらも慕われていた。当時の茨木中学校は入学から卒業まで五年間同じ学年を受け持っていたようで、川端達の大正六年卒業（中学十八回生）は卒業式を一か月後に控えていた。

その倉崎仁一郎が大正六年一月末日に急死し、三月に卒業式を控えていた五年生たちは動揺する。体育の授業を担当していた杉本傳がこの五年生たちに学年会（以後「学年級会」と呼ぶ）を開くように促した。杉本の体育の授業の時間を学年級会に使用しても良いと提案する。生徒たちは車座になり故人を偲んだという。その際に何とか先生の恩に報いたいと様々な意見が交わされた。結局倉崎仁一郎の棺を自分たちで担ぐことに話が落ち着く。杉本はこの話を実現すべく調整に尽力する。家庭のような学校を標榜していた初代校長加藤逢吉はこの申し出を快く

受け、遺族にも伝える。問題は葬儀場であった。当時倉崎家の檀家寺であった臨済宗妙心寺派本源寺は本堂が狭く、参列者を収容できる程の広さは無かった。そこで近くの真宗大谷派茨木別院を使えないか同窓会久敬会を通じて関係者に打診をした。その結果特例として葬儀場を使えるようになった。葬儀の当日、倉崎仁一郎の自宅から茨木別院に生徒達が棺を運ぶことになった。写真には花環が写っており、川端の作品には提燈があつたと書かれている。八十八人の五年生達は倉崎仁一郎宅から茨木別院、茨木別院から長田（ちようだ）の火葬場へ棺を担ぎ歩いた。生徒葬とも言うべきその葬列は当時の茨木の人々から「今時何と珍しい」と話題になったと昭和四十二年の同窓会の席で、当時小学生だった津田勝会員（第二十三回）が回想している。

この出来事を書いた川端康成の文章「生徒の肩に棺をのせて」が雑誌「団欒」（大正六年）に掲載された。その後も「倉木先生の葬式」（「キング」昭和二年）、「師の棺を肩に」（「東光少年」昭和二十四年）とこの生徒葬を題材にした作品を世に出している。三作品

に共通するのは生徒達の一致団結した姿である。自ら企画実行する様子が詳細に描かれている。この時、倉崎仁一郎の棺を運ぶことを提案したのが後述する藤波大超である。

二、藤波大超と隠れキリシタン史料

藤波大超は明治二十七年十月六日に大阪府茨木市安元にある東本願寺（真宗大谷派）安元山教誓寺に生まれる。長じて大阪府立茨木中学校に入学するが、欠席日数も関係してか留年をしている。その為卒業する五年級では五歳年少の川端康成たちと一緒になっている。この時の歴史の教員が天坊幸彦である。天坊は継体天皇陵を提唱していた人物で知られており、この天坊から藤波は隠れキリシタンの話を聞き郷土史に関心を持った。卒業後は実家教誓寺の住職をしながら母校の忍頂寺小学校の教師になり、同校の校長として奉職する。退職後は昭和六十二年に開館した茨木市立キリシタン遺物史料館館長でもあった。藤波は中学時代に聞いた天坊先生の話をもとに千提寺の調査をして、大正九年に隠れキリシタンの

史料を発見した。昭和五年までにマリア十五玄義図、ザビエル画像などを次々と発見した。平成五年三月日に九十八歳で死去した。

茨木の山間部は高槻城主でキリシタン大名で知られていた高山右近の領地であった。歴史の教師であった天坊はこの地域の地理や歴史に詳しい歴史学者でもあったので、授業中にキリシタンの遺跡が残っている可能性を示唆した。茨木中学校を卒業した後、藤波は千提寺の東藤次郎からキリシタン墓碑の存在を聞き出すことに成功する。大正八年のことであった。その翌年は東家の母屋の屋根の梁に固定されていた「あけずの櫃」を発見する。この中にかの「聖フランシスコ・ザビエル」の絵が入っていた。千提寺や下音羽地域にキリシタン遺跡が残っていたと指摘した天坊の学説は正しかったことになる。

天坊幸彦は明治四年に京都に生まれた。（昭和三十年没）東京帝国大学を出て大阪府立茨木中学校で長く歴史を教えていた。天坊は高槻一帯の歴史を研究している過程で今城塚古墳が第二十六代継体天皇陵であることを指摘し、大正四年以来大阪府や宮内庁

に上申、保存を進言している。

三、生徒葬秘話

倉崎仁一郎の葬儀に関して川端は次のように触れている。

小林といふ記者が初対面の中学生に鄭重で親切なのは、二月十八日の日記を見て驚かれるが、大学を出て間もなくの文学青年だったのだらう。田舎町へ来て話相手もないところから、文学少年の私が珍しかったのだらう。その後も幾度か訪問した。私の真面目を認めて真面目に話してくれた。私の級の英語教師倉崎仁一郎先生とシエクスピアについて談じたと言ひ、先生の學徳に敬服してゐたことがあつたのを、私は覚えてゐる。

この倉崎先生は私が五年生の冬に急死された。教へ子の五年生が葬式萬端に奉仕した。校葬であつたらうが、生徒葬と言つてもよく、教へ子が柩をかついで寺へ行き、五年生全員が寺で通夜をし、焼場まで送つた。

私はその記事を書いて、當時石丸梧平氏が大

阪で發行してゐた雑誌「団欒」に投稿した。石丸氏から感動したとの返書があり、「団欒」に大きく掲載された。確か「師の柩を肩に」といふ題も石丸氏がつけてくれたと思ふ。しかし三十枚ほどの長文がずるぶる削減されてゐた。私の書いたものが雑誌に出たはじめである。その「団欒」は今手もとに残つてゐないが、その草稿はやはり文反古のなかに見つかった。新潮社版大正五年の「文章日記」一月分に書き続けてある。まだ読み返してみない。私の書いたものが雑誌に出たはじめは、この「師の柩を肩に」であつた。（川端康成「独影自命」「川端康成全集」昭和二十三年四月二日 ※傍線・宮崎）

この葬儀をもとにして川端は「生徒の肩に柩をのせて」（「団欒」大正六年）、「倉木先生の葬式」（「キング」昭和二年）、「師の柩を肩に」（「東光少年」昭和二十四年）と三回作品を執筆している。共通しているのは生徒が提案し、協議して実行した点である。この棺を運ぶという提案をした人物は作品内では特定できなかった。しかし次に上げる会報で明らかに

されていた。「大正六年一月二十九日朝倉崎先生が突然逝かれました日、当時のお受持の五年生であった方々が五年級会を臨時開いて協議の末藤波大超君の発言に一同先生のもとに五年生の生徒葬を校長に申し出て許可を得て、いとも厳肅なる御葬儀がそこに催された五十年の昔を思い出しますのであります」（杉本傳「倉崎仁一郎先生小笠原利孝先生法要の事」「会報」久敬会 昭和四十二年）臨時学年級会の場合を提供した体育教師杉本傳が「藤波大超」だと覚えていた。茨木中学校開校以来のこの葬儀は当時随分と話題になったことが次の証言からも分かる。「私は倉崎先生が亡くなられた大正六年は、尋常小学校の六年生でした。風の噂で茨木中学の倉崎先生が突然亡くなった。しかもそのお葬式は生徒が申し出て全部生徒の手でお葬式が執り行われた。無論今と違いますので霊柩車もございませんから、花を奉げる者、提灯を持つ者、先生の棺を担ぐ者、全部生徒がやったという事を私小学時分に聞かされまして、倉崎先生とは一体どういう顔をなさったどんなお方であろうかと考えた事がございます。何だか先生の一段上におら

れる先生、人間の一段上におられる人間、今の言葉で言えばスーパーマンとでも言いましょうか。そういう何だかおそるべき人のような印象を与えられた事をはっきり覚えています。」（中二十三回津田勝「倉崎仁一郎先生小笠原利孝先生法要」オープンリールより）

倉崎仁一郎の墓も久敬会が建て、五十回忌の法要も行っている。茨木中学の関係者には忘れがたい出来事であったことが分かる。因みに昭和四十二年に行われた「故倉崎・小笠原両先生追悼法要協賛者」が寄せた御供は総額十七万一千円であった。百七十名ほどの人から寄せられたので平均で一人千円であろうか。川端康成も法要に出席こそしていないが、二千元出している。恩師の棺を担いだ八十八名の生徒達は、倉崎先生が逝去したのと同じくらいの年齢になっていた。

まとめ

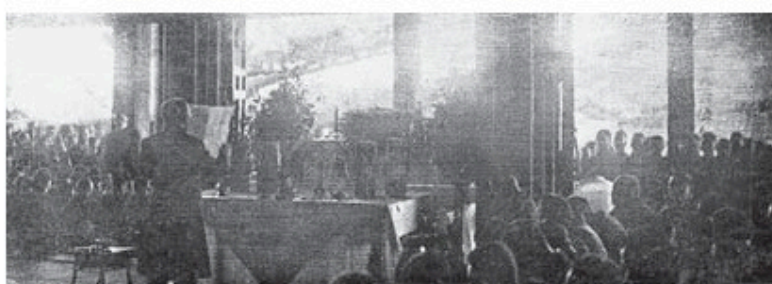
川端康成と藤波大超は、大正六年一月三十一日に恩師の葬儀を自らの手で執り行った仲間であった。



倉崎仁一郎の遺影

《写真資料》所蔵は全て大阪府
立茨木高等学校資料室

以上のことから同時期に茨木中学校に教員として勤務していた倉崎仁一郎と天坊幸彦は生徒たちに大きな痕跡を残していたことが分かった。いずれの場合も教師の一言が契機となり、大きな功績につながった事例である。尚、現在の大阪府立茨木高等学校（前身は茨木中学校）も生徒が企画発案し実行する伝統（妙見夜行登山・体育祭）は変わっていない。



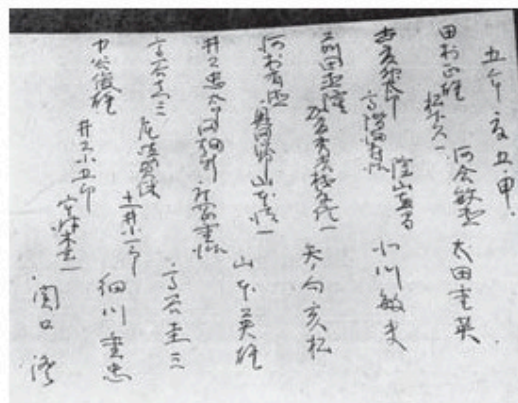
茨木別院での倉崎仁一郎の葬儀（弔辞は加藤校長か）



花環と茨木中学生たち

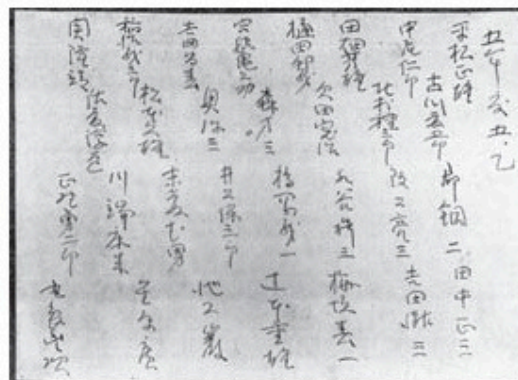


倉崎仁一郎の棺を担ぐ茨木中学生たち



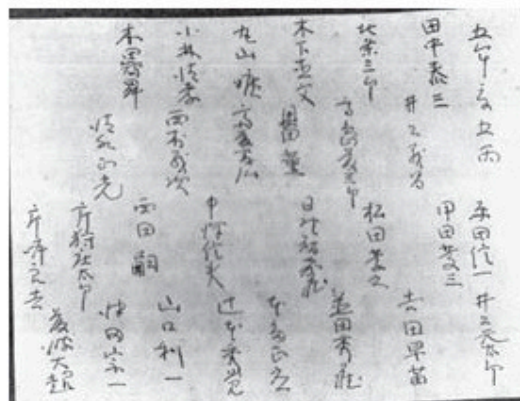
〈五年甲組〉

- 4列 中谷俊雄、高谷眞三、井上忠太郎、河村有徳、前田直隆、古藤卯太郎、田村正雄
 3列 井上小五郎、尾崎貞保、田畑新、奥田治郎、加藤秀吉、高階満寿治、松下久一
 2列 宇津木亥一、土井小一郎、片岡重治、山本清一、植原信一、陰山恵昌、河合敏直
 1列 関口澄、細川重忠、高谷圭三、山本英雄、矢ノ向亥松、北川敏夫、太田重英
 ※【欠席者】松生利直



〈五年乙組〉 二列目左から二人目が川端康成。

- 4列 関隆靖、稻治儀三郎、吉田昌春、宮脇亀之助、樋田邦義、田畑芳雄、中尾仁郎、平松正雄
 3列 佐藤淳道、松本久雄、奥彌三、森才三、欠田寛治、北村種三郎、古川藤五郎
 2列 正野勇次郎、川端康成、末藤武男、井上保三郎、橋岡義一、水谷鼎三、阪上亮三、郡剛二
 1列 丸島豊次、金原廣、池上巖、辻本重雄、梅垣春一、吉田瀧三、田中正三



〈五年丙組〉 一列目左から一人目が藤波大超。

- 4 列 本田智昇、小林清孝、丸山曠、木下直文、北條三郎、田中泰三
 - 3 列 清水正光、西村義次、齊藤善弘、奥田薫、高島藤三郎、井上義昌
 - 2 列 片岸良吉、片狩庄太郎、西田孝嗣、中澤信夫、日野智嘉蔵、松田慶之、甲田慶三、原田信一
 - 1 列 藤波大超、津田宗一、山口利一、辻本秀覚、本田正應、並田秀蔵、吉田早苗、井上元太郎
- ※【欠席者】村田富平